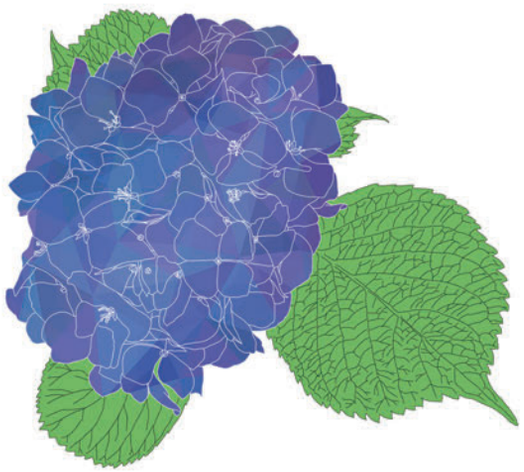
あぶな絵、あぶり声　～葵～

Sample

Sample

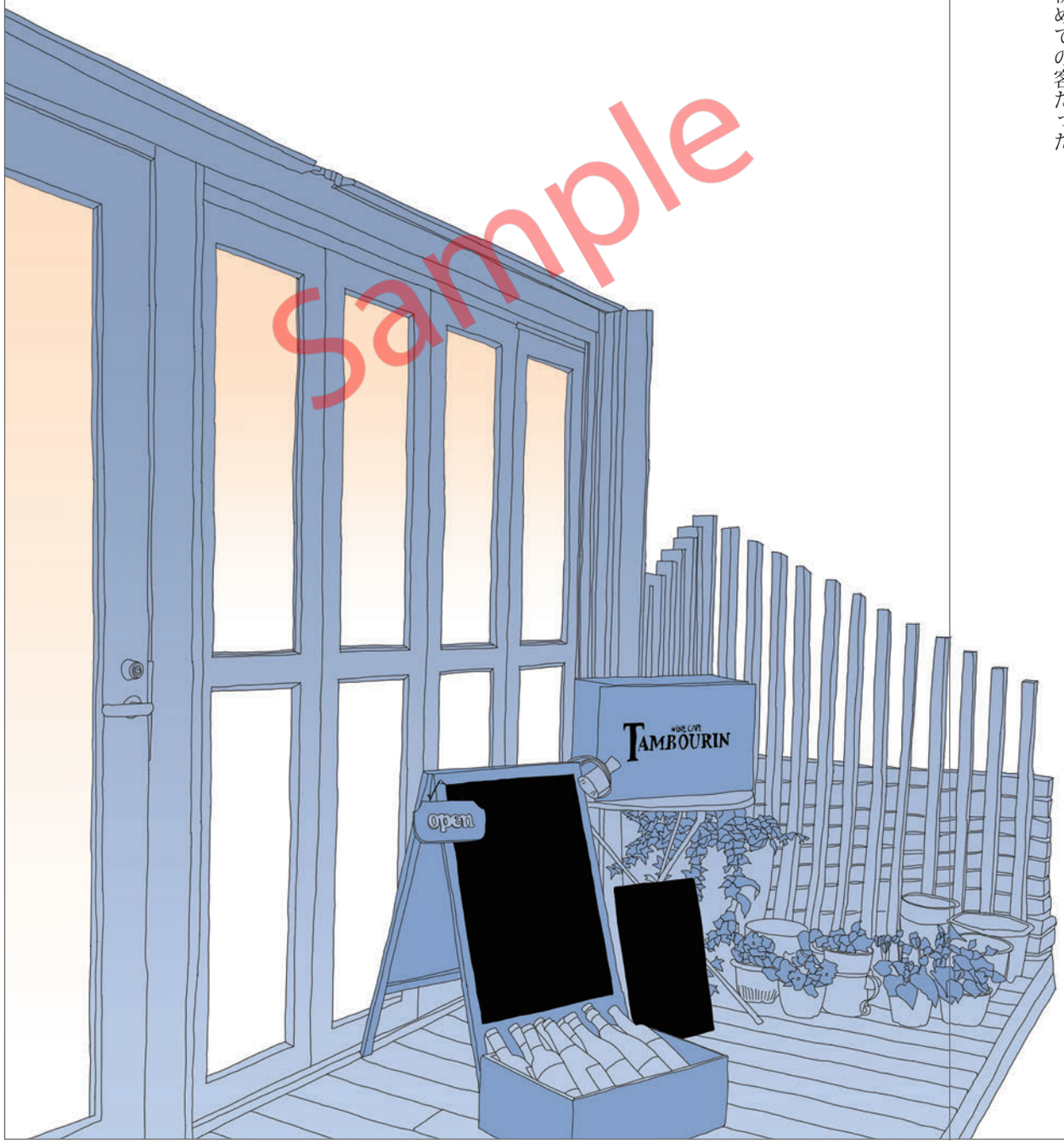
第一話　めぐる女　07
第二話　瞬く女　35
第三話　止める女　63

Sample



第一話　めぐる女

Sample



Sample

入り口の扉が開くと、湿度を帯びた温い風が滑り込んで来た。細い雨はさらさらと音を立ててコンクリートの地面を淡く濡らしている。

水分を帯びた道路を車が滑り、雨粒をはじいて過ぎ去ってゆく。外を覗き込むと、空はいつの間にかみっしりと分厚い雨雲で覆われていた。

「……もう一軒行く？」

甘えたような男の声に振り向く。

先ほど会計を済ませたカップルは入り口の扉に身体を預けていた。

女の腰を抱え、獲物を仕留める蛇のような鋭い目を向けている男。

女は返事をすることもままならないほど泥酔しており、ぼんやりと首を傾げて男に身体を預けている。

男は薄い生地に包まれた腰を撫でまわし、にやにやと下劣な笑みを浮かべている。

初めての客だった。

どういういきさつで出会ったのかは分からないけれど、酔わせてベッドへ誘い込もうとしていることは明白だ。

余計なお世話だとは思いつつも、女が注文したカシスオレンジのリキュールは控えめにしたのだが、あまり効果はなかったようだ。

男の肩に頭を預け、女は抱きかかえられるような形で店を出ようとした。

「お客さん」

男が背中を預けている扉に手をかけて、声を掛けた。

「今日は、早く帰ったほうがよさそうですよ。この雲の感じだと、雨足が強くなりそうだ」

傘を渡すと、男は露骨に怪訝そうな瞳を向けて来る。

「申し訳ありません、あいにく傘が一本しかありませんので……そうだ、こちらのお客様には、タクシーをお呼びしましょう」

言い返したそうな男を尻目に、店の前の大通りに視線を向けて素早く手をあげた。

まだ書き入れ前の空車のタクシーがするりと店の前に付ける。

男からその女を引きはがし、手を取りながらタクシーに乗せた。

「自宅、言える？」

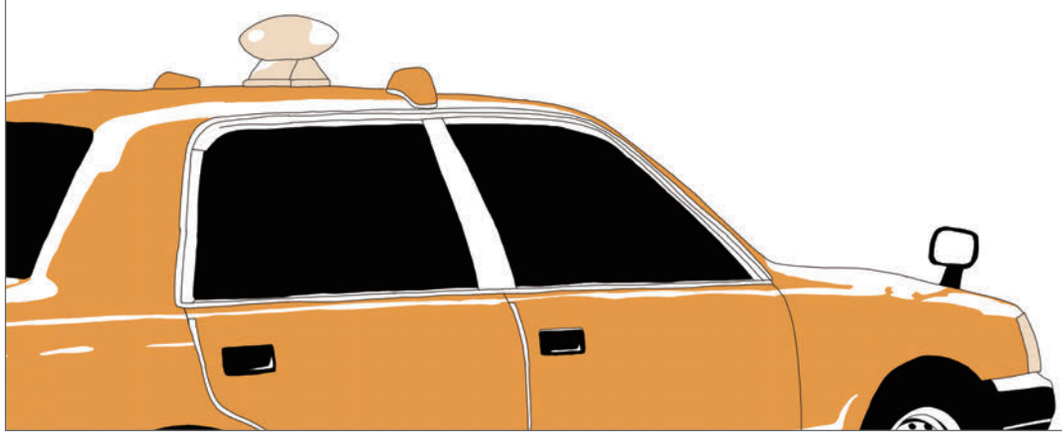
女はこくりと頷き、運転手に駅名を告げる。

俺は安堵し、運転手に目配せをした。

タクシーのドアが閉じられると、女はガラス越しに俺を見て、軽く会釈をしながら、ありがとう、と口元で紡いだ。

ふう、とため息をつき、腰に手をあてる。

女を口説くためのきっかけとして酒を使うことは賛成だけれど、セックスの手段として酒を使うことだけはどうしても釈然としない。



Sample

「相変わらず、カタいわね」
ぽんと肩を叩かれて、反射的に振り向いた。
顎まで揃えられた柔らかそうな髪を耳にかけて、微笑んでいた。
もう出会ってから10年以上も経つのに、君は変わらない。
その屈託のない笑顔を目にするだけで、俺の心はするすると柔くほどけてしまう。まるで、雨に濡れた紫陽花の花弁のように。
「昔から妙なところ真面目なんだから……あの男、バツが悪そうな顔して帰っちゃったわよ？」
俺は肩をすくめて笑った。
「自分の店とはいえ、客に恥かかせるなんて、店長失格だな」
「良いんじゃない？　真面目でカタくて不器用なところが君の良いところなんだからさ」
そう言って、彼女は俺の背中をぽんと叩く。
「さあ、今日の私は校了明けでいつも以上にお腹空いてるんだから。たくさんおいしいもの作ってよね！」
彼女は、大学時代の映画サークルの仲間だった。
10数人所属していたサークル仲間のうち、いちばん映画の話が合うのが彼女だった。
大学を卒業し、俺は念願だった映画配給会社へ就職。彼女は出版社に就職した。
彼女が志望していた月刊映画誌の配属は未だ果たせていないけれど、週刊少年誌のデスクとして不眠不休の日々を過ごしている。

Sample

映画配給会社を退社し、昔から憧れていたバー経営を始めたのは、今から四年前。以来、俺が経営しているこのバーは彼女の台所のようなものだ。
大学を卒業してからは年に数回のＯＢ会や、仲間の結婚式などで顔を合わせる程度だったが、彼女が半年前にこの街に引っ越して来てから、週に数回この店に来るようになった。